

# 東成の歴史

シリーズ  
No.5

“明治のひがしなり”

大阪府文化財愛護推進委員  
東成区コミュニティスクール“歴史シリーズ”講師

友 田 譲

明治に入り旧幕藩体制から明治新政府に移り、慶応から明治初年頃までは、朝令暮改といわれたごとく、諸制度の改革は実にひんばんでした。

明治4年の廃藩置県により「大阪府」が設置され、その管轄下に翌5年戸長役場制度や市町村制公布などによる行政が行われたことは、行政のうつりかわりに記したとおりです。

明治期前半の当区は、綿・米・麦・菜種などを主に栽培する農村が点在し、区内を流れる平野川、猫間川などの各河川により、水利の便に恵まれたのどかな農村地帯でした。後半に当時の村の一部が大阪市に編入され、大阪造兵工廠の設置（明治12年）や城東練兵場の開設（明治23年）などの影響により、漸次西部から開発され、とりわけ中本村（現北中道・中道・中本）方面は住宅地や家内工業地となり、大阪市に隣接する鶴橋方面は商工業が目立ち始め、農業地より早くも転換の途をたどり開けて行きました。

然し明治時代の当区はまだ農業が主であり、水利、水害対策は各村政の中心課題でもありました。明治2年に五千石堤防水害予防給合が設立され、水防行政に重要な役割を果し、その後の淀川左岸水害予防組合に引き継がれました。

明治期の中で当区の最も大きい出来事は、明治18年の淀川大洪水による悲惨な被害でしょう。この大洪水は6月中旬から7月初旬にかけ大雨

が降り続き、6月17日枚方付近で淀川堤が決壊したのを皮切りに、遂に7月2日早朝から空前の大洪水となりました。

北河内・中河内を始め、当時の東成郡・西成郡や市内の一部は泥海と化し、一夜にして大湖水が出現したと記録されています。

当区内の冠水の最高水位は4mにも達したと伝えられ当時のものすごさを物語っています。

現在、大今里一丁目にある八王子神社お旅所（俗称楠神社）の楠の大樹に、村人40数人が登りかろうじて難をのがれ、数日後救助班に救出されたことが今なお語り継がれています。区内家屋の流失・死者・行方不明など被害は甚大で、想像を絶する惨状であったといわれています。

このような大被害から淀川改修の議が起り、明治30年に起工され、千数百万円の巨費と10年余りの歳月により、今の新淀川の開きくと、毛間の閘門が明治42年に完成し、以後淀川からの大洪水の心配がなくなりました。

一方、明治5年学制が布かれ、15年に阪東尋常小学校（神路小の前身）20年に東生尋常小学校（中本小の前身）がそれぞれ創立され、大正・明治にかけて次第に増設され現在に至っている。

また明治28年民間鉄道として現在のJR環状線が開通し、当区の地域発展と住民に多大の便を供してくれました。

ご意見、ご希望は…… 市立東成会館（財）東成区コミュニティ協会 TEL6972-0717 FAX6972-0838  
Eメールアドレス：enarik@mbox.inet-osaka.or.jp